KAPPA NOVELS

長編推理小説

宗谷本線殺人事件

そうやほんせん

西村京太郎

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、最近、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（〒112-11）
光文社出版局

長編推理小説　宗谷本線殺人事件
1990年2月28日　初版1刷発行

著者　西村京太郎
発行者　大坪昌夫
印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録 116613
© Kyōtarō Nishimura 1990

ISBN4-334-02860-8
Printed in Japan

宗谷本線殺人事件

西村京太郎

カッパ・ノベルス

宗谷本線殺人事件　目次

第一章　急行「利尻」　5
第二章　宗谷本線事件についての疑問　30
第三章　新しい恋人　65
第四章　網走　108
第五章　再検討　142
第六章　追及　171

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

イラストレーション　辰巳四郎

第一章　急行「利尻」

1

田島は、旭川での取材をすませると、午前〇時二〇分発、稚内行きの寝台急行「利尻」に乗るために、粉雪の舞う中を、ＪＲの旭川駅に急いだ。

北海道は、何度来ても楽しいと思う。特に田島は、夏よりも厳しい冬の北海道のほうが好きだった。

今日は、十二月六日になったばかり。すでにこの北海道では、白銀の世界が生まれている。

旭川駅前の広場も、十センチくらいの積雪で、そのうえ夜に入って凍りつき、滑りやすくなっていた。

田島は、入口の近くで見事に滑って、転んでしまった。ひとりで照れて苦笑しながら、コートについた雪を払い、駅の構内に入った。

さすがに、この時刻では、がらんとして、乗客の姿も、ぽつんぽつんとしか見えない。

少し早く着いてしまったので、田島は、待合室に入った。三人ほど、乗客の姿があった。多分、同じ「利尻」に乗る人たちだろう。

田島は、椅子に腰を下ろした。煙草に火をつけたが、三人の中の一人に気を引かれた。

五十五、六歳の男で、膝の上にスーツケースを置き、一心に原稿を書いていたからである。

同じ物書きとしての興味だった。
同じといっても、田島のほうは、冬の北海道のさまざまを、スケッチとともに記事にして、雑誌社に送るだけの手なれた仕事だったから気楽なものだが。札幌、旭川と旅して、原稿とスケッチはもうファックスで送ってしまっていた。
これから稚内に行き、最北端の冬景色を取材すれば、今回の旅は終わりである。
問題の男は、ときどきペンを持つ手を止め、じっと考え込んでいる。そして、次の瞬間、一刻も早く書き上げなければならぬという感じで、忙しく手を動かした。ペン先が原稿用紙の上できしむ音が、聞こえて来そうな感じさえした。
(作家だろうか?)
と、田島は考え、自分の知っている作家の顔を思い出してみたが、その中に、この男の横顔はなかった。
時間が来て、田島が待合室から出て、改札に向かうと、その男も、原稿をスーツケースにしまって立ち上がった。どうやら、同じ「利尻」に乗るようだった。
ホームは、やたらに寒かった。
粉雪が容赦なく吹きつけ、ホームのところどころにへばりついた雪が、アイスバーンを作っている。
アナウンスが、ホームが滑りますから注意してくださいと、叫んでいた。
赤いディーゼル機関車に牽引された、五両編成の「利尻」が入って来た。
「利尻」の文字の入った大きなヘッドマークにも、雪がこびりついて、ローマ字の部分が、見えなくなっている。札幌からここまでの間でも、雪が降っているらしい。

五両の青い客車の屋根にも、雪が積もっていた。二両が寝台車、あとの三両は、座席車である。

田島は、3号車に乗り込んだ。雑誌社がこの列車の指定席のほうを取っておいてくれたからである。

ひょっとして満席だったら困ると思ったからだろうが、実際に乗ってみると、車内はがらがらだった。数えてみると、自分を含めて七、八人しか乗っていない。

前半分が自由席で、座席のカバーが白、後ろ半分は指定席で、ブルーのカバーに白抜きで、指定席と書いてある。それだけの違いだった。

気になる例の男は、自由席のほうに腰を下ろした。

田島は、列車が走り出してから、彼がどうしているだろうと思い、自由席のほうに移ってみた。

ほかの乗客はたいてい二つの席を占領して眠っていたが、あの男は、またスーツケースの上に原稿を広げていた。

何を書いているのか知りたかったが、軽く声をかける雰囲気ではなかった。田島も、物書きの端くれだから、他人に、あれこれ話しかけられたくないときがあることは、わかっている。それだけに、見守っていることしかできなかった。

その代わりというわけでもないが、田島は、相手のことをあれこれ想像して、楽しむことにした。

顔に見覚えはないが、旅行中でも原稿を書いているのだから、大変な流行作家かもしれないと考えたり、逆に年齢はくっているが、作家志望で、何かの懸賞に出す原稿を、一生懸命に書いているとも考えられた。最近は、平均寿命が長くなって、会社を定年になってから小説を書く人が増えていると、聞いたからである。

そう思って男を見れば、年齢も定年過ぎに見える

のだ。

会社を定年になった男が、若いとき文学青年だったことを思い出し、何かの文学賞に応募しようと、懸命に原稿を書いている。舞台は、もちろんこの北海道。そう考えると、ほほえましい光景といえなくもない。

田島は、現在、四十歳だが、二十代から三十代にかけては、いくつかの文学賞に応募したことがある。いいところまではいったが、当選したことはない。そんなことも思い出されて、もし、眼の前の男がそれなら、がんばれと応援してやりたくもなってくるのだ。

2

午前一時過ぎに、和寒に着いた。

窓の外を見ると、駅の明かりの中で、相変わらず雪が舞っている。

案内書を開くと、和寒は、アイヌの言葉の「ワット・ササム」（ニレの木のそば）から来ていると書かれている。北海道の地名や駅名のほとんどが、アイヌの言葉から出ているのは、まぎれもなくこの地が、アイヌのものだったことを示している。

列車は、ごとんと大きくゆれてから、和寒を出発した。

あの男に眼を戻すと、疲れたのか、眼をしばたたき、そのあと煙草に火をつけた。

このあと、急行「利尻」は、士別、名寄などに停車し、終着の稚内には朝の午前六時〇〇分に着く。

この時刻に着くと、その日一日、取材ができるので、田島は、稚内に行くときは、「利尻」を利用することが多かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

稚内の駅の売店なども、この列車の到着に合わせて、オープンしてくれる。

田島は、午前三時一二分に、音威子府に着いたまでは覚えていたが、そのあと、車内の暖かさと取材の疲れで、ほかの乗客と同じように、座席に横になって眠ってしまった。

起きたのは、午前六時近くで、列車が停まり、「稚内」という駅名を見てあわてたが、一駅手前の南稚内だった。

五分ほどで、列車は、終着の稚内に着いた。

そのときになって、田島は、あの男の姿が消えているのに気がついた。

ほかの車両に行ったのだろうかと思ったが、ホームに降りても、姿が見えない。気になったので、しばらくホームに残って見ていたが、彼が降りてくる様子はなかった。

どうやら、途中で降りたらしい。

音威子府から稚内までの間には、天塩中川、幌延、豊富、南稚内、と停車しているから、そのどこかで降りたのかもしれないし、音威子府でも、田島は、眠たくて仕方がなかったから、そこで降りてもわからなかったろう。

稚内の駅は、まだ暗かった。

いつ来ても、この駅は、小さくて、行き止まりにやって来たという感じがする。ホームも一本しかない。つまり、1番線と2番線しかないのである。

しかし、稚内の町は、意外に大きい。人口も五万人を越え、ビルも林立していて、北の果てに来たという感じは、あまりしない。

田島は、駅前の小さな食堂に入り、かにめしを食べた。

その間に、少しずつ、周囲が明るくなって来た。

食事をすませたあと、田島は、タクシーを時間借りにして、稚内の市内や、市外の名所を廻ってみることにした。

まず、早朝から開いている市営の魚市場をのぞいてみた。北の港町らしく、毛ガニやタラバガニが並んでいるが、その数があまり多くないのは寂しかった。その代わり、カレイやキンキが豊漁だという。

そのあと、車で五分の距離にある稚内公園に向かった。「利尻」に乗っている間、ほとんど雪が降っていたのだが、今は晴れ間が見えていた。

ただ道路は凍結していて、朝陽を受けて光っている。ほかの車は見当たらないし、観光客らしい人影もない。

公園の中には、南極物語で活躍したタロー、ジローを記念した檻や、氷雪の門、ロープウェイなどもあるのだが、来ているのは、田島一人だった。

「すいているねえ」

と、田島が感心すると、タクシーの運転手は、

「この時期は、何にもありませんからねえ。二月になれば、流氷観光船も出るんですが」

「観光バスも、走ってないんだね」

「十一月十九日で、終わりです」

「まあ、すいてていいがねえ」

と、田島は苦笑したが、名所の写真を撮っても、一人も観光客の姿が入っていないと、間が抜けて見えるだろうとも思った。

北海道は、もうスキーシーズンだが、スキー客は、札幌からニセコなどのスキー場へ行ってしまって、稚内までは来ないのだろう。

もっとも、稚内は風が強いせいか、札幌や旭川のような積雪は、見られなかった。地面が冷たく凍りついているので、雪が降って来ても、風の吹くまま

に、地面を滑っていってしまうせいらしい。
「人々は、この地から樺太に渡り、樺太からここに帰った」と刻まれた氷雪の門のところに立つと、稚内の町を見下ろすことができた。
海に沿って、南北に細く伸びた街であることがよくわかる。田島は、何枚か写真を撮った。
田島は、次にノシャップ岬に行ってくれと、運転手に頼んだ。
自衛隊基地を過ぎて、十五、六分走ると、土産物屋が集まっている一角にぶつかる。その先に、市立ノシャップ寒流水族館があるのだが、ここも十一月二日から閉館していた。もちろん土産物屋も閉まっていて、人の気配もない。
田島は、水族館の裏に廻った。
コンクリートの岸壁に、ぽつんと一本、木の柱が立っていて、それに「ノシャップ岬」と書かれた札がさがっている。
前に来たときも、田島は驚いたのだが、あまりにもこの標識は、小さ過ぎるのではないか。ちょっと離れると、何の標識か、まったくわからなくなってしまうからである。
いぜんとして、観光客の姿はまったく見当たらなかった。
田島は、宗谷岬に廻ることにした。
海岸沿いの道路を走る。たまにトラックとすれ違うぐらいで、夏のように、若者の乗った車を見ることもなかった。
陽差しが明るくなって、いくらか暖かくなってきた。
宗谷岬には、ノシャップと違って、モダンな記念碑が建っている。夏に来たときは、碑のまわりは、新婚カップルやバイクの若者たちでいっぱいだった

が、今は誰もいない。
そのモニュメントを囲むように、民宿や食堂、土産物屋が並んでいるが、どの店も、日本最北端が売り物になっていた。
〈日本で一番北の食事処、食堂「最北端」〉
〈日本で一番北の民宿「柏屋」〉
〈日本最北端　そうやみやげ店〉
そんな文字が氾濫しているのだが、今日はほとんどの店が閉まっていた。
田島は、唯一つ開いていた食堂「最北端」に、運転手と一緒に入り、特製のラーメンを食べた。
ラーメンの名前も「最北端」である。シマエビ四本、ホタテ一つ、カニの足二本などが盛り沢山に入ったラーメンで、千円だった。この店の主人も、来年の流氷の季節にならないと、観光客は来ないねといった。
外に出ると、民宿がスピーカーで、「宗谷岬」という唄を流している。いい唄なのだが、観光客の姿がないガランとした景色の中で聞くと、妙に物悲しかった。
田島は、「利尻」で稚内に着いたときも、ホームに同じ曲が流れていたのを思い出した。
稚内の町に引き返し、JR駅に近い旅館に入った。この旅館も、泊まり客は田島だけのようだった。
東京の雑誌社に電話をかけ、明日もう一度、取材をしてから、急行「礼文」に乗って旭川に戻ることを話した。
そのあとはもうプライベイトな時間だから、登別温泉にでも寄ってみようかと、田島は考えていた。
夕食のあと、夜の稚内の町を探訪してみようと思ったが、旅館を一歩出ると、耳がちぎれるように寒いのである。あわてて飛び込んだ近くのスナックで、

一時間ほど飲んで、旅館に戻った。

3

翌七日も快晴だった。早朝、眼をさまし、窓の外に眼をやると、きらきら光るものが見えた。

ダイヤモンド・ダスト現象である。十二月の稚内では、きわめて珍しい。

（今日は、何かいいことがあるかもしれないな）

と、田島は勝手に決め込んで、朝食のあと、最後の取材に出かけた。

昨日、見なかったドーム式の防波堤を、見に行った。

昔、ここから、樺太（サハリン）行きの連絡船が出たというところで、本屋根式のコンクリートのドームが長く伸びていて、日本離れした景色である。

そのあと、タクシーで稚内空港に廻った。稚内から宗谷岬へ行く途中で、海沿いに作られた空港である。

小さいが、白と赤のツートンカラーの洒落た建物の中に入り、田島は、写真を撮るために、三階の送迎デッキにあがって行った。

送迎デッキの入口は、五十円を入れる回転バーになっている。料金器を見ると、「空港の建物に莫大な費用がかかっております。どうか無料で通行しないでください」という貼り紙がしてあった。

よく見ると、回転バーには、隙間があって、身体を横にすれば、楽にすり抜けられるのだ。

田島は、苦笑した。多分、五十円を払わずに、バーの隙間をすり抜けて、送迎デッキに出て行く人間が多いのだろう。

田島は、面白いと思い、写真に撮ってから、五十

円払ってデッキに出た。
滑走路には、YS11が、一機、駐まっていた。白色の機体に、ブルーのラインの入ったエアーニッポンの飛行機である。稚内—札幌（千歳）間の便だった。
一日、往復一便ずつだけの便である。そのほか、同じ札幌の丘珠空港へも、一便ずつの飛行機が飛んでいる。
田島は、滑走路の向こうの青い海を入れて、写真を何枚も撮った。
（こんなところでいいかな）
と、田島は自分にいい聞かせて、送迎デッキを離れた。
田島は、稚内に戻って、急行「礼文」に乗るつもりだったが、途中で、南稚内からにすることにした。
稚内空港からでは、南稚内のほうが近かったからである。
稚内の一つ手前の南稚内は、もともと宗谷本線の終点だった。天北線も、この南稚内から分岐している。
ホームも二本あって、駅も稚内より大きい感じだった。
田島は、上りの急行「礼文」が来るまでは時間があったので、待合室に入って待つことにした。
中央でストーブが燃えている。高校生らしい若い男女が、五、六人でそのストーブを囲んで、お喋りをしている。
隅にはキオスクがあり、その反対側に、二畳のタタミを敷いた台がある。
田島が、待合室を見廻して、「おや？」という顔になったのは、そのタタミのせいではなかった。
前に北海道に来たとき、小さな駅の待合室で、同

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong